

了賢撰『他師破決集』 訳注 (三) — 卷第一ノ三 —

別 所 弘 淳

はじめに

『他師破決集』の撰者である侍従僧正了賢(一二七九〜一三四七)は、『仁和寺諸院家記』(心蓮院本)¹には、

了賢僧正 侍従、毛利時賢子、了遍僧正御附法、東寺・仁和寺・大覚寺等学頭、附法八人

と説かれ、また同じく『仁和寺諸院家記』(恵山書写本)²には、

了賢僧正 侍従、毛利親宗子、了遍僧正附法、仁和寺・大覚寺等学頭、正安元年十一月十九日、

於菩提院道場、対大僧正了遍受灌頂、色衆八口、教授前大僧正禪助、但別座、貞和三

年 月 日、入滅

と説かれるように、毛利時賢、あるいは毛利親宗の子³であり、正安元年(一二九九)に仁和寺菩提院において了遍(一二三四〜一三二一)より灌頂を受け、東寺・仁和寺・大覚寺の学頭となった学匠である。

また、その主著『他師破決集』は、『真言宗全書』解題によれば⁴、他宗の諸学匠（徳一・道詮・珍海・最澄・円珍・安然・兼証・淡海三船等）が東密の教義等に対しておこなった疑難を破するための書であり、三十一の条目で構成されている。卷二の奥書には、「元徳三年正月日、依^二大覚寺殿仰^一注^三進之^一。法印権大僧都了賢⁵」と記され、また、卷五の奥書には、「正慶元年五月日、依^二大覚寺殿仰^一注^三進之^一／法印権大僧都了賢⁶」とある通り、元徳三年（一一三三）、正慶元年（一一三三）の頃に「大覚寺殿⁷」の仰せによって撰述されたものである。

『他師破決集』は、先行研究では、主に徳一の『真言宗未決文』に対する反駁書として取り扱われているが、それ以外の諸学匠に対する反駁が扱われた論考はほとんどなく、または部分的に取り上げられるのみであり、了賢や『他師破決集』自体を扱った研究は全くないといっても過言ではない。

そこで『他師破決集』の全体像を把握することを目的とし、訳注研究を行うこととした。この訳注において用いるのは、「承応二年刊本」を底本、「仁和寺藏古写本」を対校本とした、『真言宗全書』巻二一所収本である。

凡例

- 一、本稿は、了賢撰『他師破決集』の【原文】に、【訓読】・【典拠】・【解説】を施したものである。
- 二、【原文】は、詳細な【解説】を施すことができるように、条目を更に細かく区切ることにした。尚、【訓読】を表記しているため、【原文】に返り点を付すことはしなかった。
- 三、条目には、『真言宗全書』解題（二二七頁上～二二八頁上）にしたがって通番号を付した。巻第一ノ三に収録される条目は次の通り。
- 四、五智各別仏体事
- 四、【原文】については、いわゆる異体字の類も含め、原則として通行の字体に改めた。また踊り字も元の字体に改めた。中略を示す「○」については【原文】【訓読】ともに「……（中略）……」と表記した。
- 五、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。漢字は原則として通行

の字体を用いた。また書名は原則として『』で囲い、引用文も「」で囲った。また割注にはへゝを付した。

六、【典拠】における主要引用文献の略号は以下の通り。

『大正新脩大藏経』↓大正、『弘法大師全集』↓弘全、『真言宗全書』↓真全

七、【解説】は、関連する事柄について言及しながらも、できる限り現代語訳することに努めた。

訳注研究

四、五智各別仏体事

【原文】

五智各別仏体事

徳一未決云、五智疑者菩提心論云、五方仏位各表一智。東方阿闍仏成大円鏡智。……（中略）……中方

毘盧遮那仏由成法界智為本文。今疑。此有二失。一諸仏智不平等失、二餘仏無智失。

所言仏智不平等失者、一切諸仏各具五智。無有一仏不具五智。此論云別五方仏各成一智、不成餘四智。此即違唯識・仏地等諸論說。所言餘仏無智失者、且如娑婆界有十方仏土、而圍繞之、此中四方仏各成一智、餘四維上下此六方仏成何智耶。此疑未決^文。

【訓読】

五智各の別仏の体なる事

徳^①一の『未決』に云く、「五智の疑とは『菩提心論』^②に云く、「五方の仏位に各の一智を表す。東方阿閼仏は大円鏡智を成ず。……（中略）……中方毘盧遮那仏は法界智を成ずるに由りて本と為す」と文り。今疑う。此に二失有り。一には諸仏智不平等の失、二には餘仏無智の失なり。

言う所の仏智不平等の失とは、一切諸仏は各の五智を具す。一仏として五智を具せざる有ること無し。此の論に別して五方仏に各の一智を成ずと云い、餘の四智を成ぜず。此れ即ち『唯識』^③・『仏地』等の諸論の説に違う。言う所の餘仏無智の失とは、且く娑婆界に十方仏土有りて、これを圍繞するが如きは、此の中の四方仏の各の一智を成ぜば、餘の四維・上・下の此の六方仏は何の智を成ずるや。此の疑未だ決せず」と文り。

【典拠】

- (1) 徳一の『未決』…徳一撰『真言宗未決文』(大正七七・八六三頁下～八六四頁上)
(2) 『菩提心論』…『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(大正三二・五七三頁下)。なお、原文を示せば以下の通りである。

於三十七尊中、五方仏位、各表一智。東方阿闍仏、因成_二大円鏡智_一亦名_二金剛智_一也。南方宝生仏、由_レ成_二平等性智_一亦名_二灌頂智_一也。西方阿弥陀仏、由_レ成_二妙觀察智_一亦名_二蓮華智_一、亦名_二轉法輪智_一也。北方不空成就仏、由_レ成_二成所作智_一亦名_二羯磨智_一也。中方毘盧遮那仏、由_レ成_二法界智_一為_レ本。

- (3) 『唯識』・『仏地』…『成唯識論』卷一〇(大正三二・五六頁上～五七頁上、取意)、並びに『仏地經論』卷三(大正二六・三〇一頁中～三〇二頁中、取意)。

【解説】

この条目は、徳一撰『真言宗未決文』「五智疑」を問題としている。この疑において徳一は、『菩提心論』に「五方の仏がそれぞれ一智をあらわす」とあることを問題視し、「諸仏の智が平等でないという過失」ならびに「他の仏に智が無いという過失」の二失があるとする。

「諸仏の智が平等でないという過失」というのは、あらゆる仏はそれぞれが五智を具えているはずな

のに、『菩提心論』には、五方の仏それぞれは一智のみを具えていると説かれ、他の四智が欠けているという疑難である。「他の仏に智が無いという過失」というのは、娑婆世界は十方を仏土に囲まれているが、もし四方（東・南・西・北）の仏が一智を成ずるならば、他の六方にいる仏は智を持っていないことになってしまうのではないかという疑難である。この徳一の疑難を挙げたうえで、以下の問答が展開される。

【原文】

問。真言意、立五智各別仏体可云耶。 答。爾。

【訓読】

問う。真言の意は、五智各別の仏体を立つと云うべしや。 答う。爾なり。

【解説】

先の徳一の疑義を受けたうえでの問答である。問者は、「真言密教では五智それぞれに別の仏を立てるのか」と問い、答者は、「五智それぞれに別の仏を立てる」と答えている。

すなわち、大円鏡智を東方阿閼如来が、平等性智を南方宝生如来が、妙觀察智を西方阿弥陀如来が、成所作智を北方不空成就如来が、法界体性智（『菩提心論』では「法界智」）を中央大日如来が備えていると主張する。

【原文】

難云、今就五仏名字案仏体建立、於仏果不立勝劣、常途定判也。五仏者、四方者劣、中台者勝也。可有仏果勝劣之失。加之、五智者一仏所具也。何各別具之耶。若強立此義者、五智不具仏可有之。未足信用者也。何況唯五方仏各有一智而成五智。然者餘方仏具何智耶。云彼云此道理、不極成者歟。如何。

【訓読】

難じて云く、今五仏の名字に就きて仏体の建立を案ずるに、仏果に於いて勝劣を立てざるは、常途の定判なり。五仏とは、四方は劣、中台は勝なり。仏果勝劣の失有るべし。しかのみならず、五智とは一仏の所具なり。何ぞ各別にこれを具せんや。若し強いて此の義を立つれば、五智不具の仏これ有るべし。未だ信用するに足らざるものなり。何に況んや唯だ五方仏に各の一智のみ有りて五智を成ず。然らば餘方の仏は何れの智を具せんや。彼と云い此と云う道理、極成せざるものか。如何。

【解説】

答者の回答を受けての重難である。問者は、仏果に勝劣をつけたいことは定判であるのに、真言密教の五仏は、四仏が劣、中台が勝であるとする。すなわち、答者の見解には仏果に勝劣があるという過失があると指摘する。さらに、五智は一仏が具えている（一仏が五智をすべて具えている）はずなのに、どうして一仏が一智のみを具え、他の四智を具えていないのかと指摘する。すなわち、五智すべてを具えていない仏がいるということになり、信用することはできないと難じているのである。

更に問者は、真言密教（答者）の見解では、五方（東・南・西・北・中）の仏がそれぞれ一智のみを具え、五方仏全体で五智をなしているため、他の方角（東南・西南・西北・東北・上・下）の仏は如何なる智を具えるのか、と難じている。この難は、徳一の疑難と同様である。

【原文】

答。自宗意、因果共不生而迷悟同覺了也。依之秘經、三十七尊皆名自性身、釈經、因果共立如來之名字。顯業者捨因取果故、見仏仮相不知仏実体。抑五仏者、大日者以果極円満總体為仏、四仏者以本有四点辺徳為仏。為顯此義故、建立五仏別体。

於仏智不平等失者、人法一体故、有法者必有人。有五智各別道理者、仏体何無五人耶。然各具五智故、各雖主一智、五智円満之義、更不相違者也。所謂四仏者大日之四智、四菩薩者是阿闍之四智也。合中台為五智。餘仏可准之。凡万法皆有四方中。又有五季、有五大、有五穀、有五常、有五音。此等又法性也。今約人之時名五仏。

於餘仏無智失者、四維仏智者金剛界八供養也。胎藏界四行菩薩三摩地也。上下仏者、上方者金剛界大日、下方者胎藏界大日也。金剛界者智故陽也。胎藏界者理故陰也。以金胎如次号天地曼荼羅此意也。依之一切仏偏非可主智。戒定慧等功德、各各現仏体。仍五方仏者五智所現、四維尊者四定、上下仏者理智也。或又諸尊悉可云表智。秘經云、三十七円智^文。雖有分定慧之辺、通皆名智故、十方仏各表一智。又具諸智准五仏悉之。

【訓読】

答う。自宗の意、因果共に不生にして迷悟同じく覺了なり。これに依りて『秘經』⁽¹⁾に、三十七尊は皆な自性身と名づけ、『釈經』⁽²⁾に、因果共に如来の名字を立つ。顕家は因を捨て果を取るが故に、仏の仮相を見て仏の実体を知らず。抑も五仏とは、大日は果極円満總体を以て仏と為し、四仏は本有四点の辺徳を以て仏と為す。此の義を顕さんが為の故に、五仏の別体を建立す。

仏智不平等の失に於いては、人法一体の故に、法有れば必ず人有り。五智各別の道理有るに、仏体何ぞ

五人無からんや。然ども各の五智を具するが故に、各の一智をつかさど主ると雖も、五智円満の義、更に相違せざるものなり。所謂る四仏は大日の四智、四菩薩は是れ阿闍の四智なり。中台を合して五智と為す。餘仏もこれに准ずべし。凡そ方法皆な四方の中に有り。又た(3)五季有り、(4)五大有り、(5)五穀有り、(6)五常有り、(7)五音有り。此れ等も又た法性なり。今人に約するの時に五仏と名づく。

餘仏無智の失に於いては、四維の仏智は金剛界の八供養なり。胎藏界の(8)四行菩薩の三摩地なり。上下の仏とは、上方は金剛界大日、下方は胎藏界大日なり。金剛界は智の故に陽なり。胎藏界は理の故に陰なり。金胎を以て次いで(9)の如く天地曼荼羅と号するは此の意なり。これに依りて一切の仏は偏に智を主るべきに非ず。戒・定・慧等の功德、各各の仏体を現す。仍て五方の仏は五智の所現、四維の尊は(10)四定上下の仏は理智なり。或は又た諸尊悉く智を表わすと云うべし。『秘経』(11)に云く、「三十七円智なり」と文り。定・慧を分かつの辺有りと雖も、通じて皆な智と名づくる故に、十方仏は各の一智を表わす。又た諸智を具すること五仏に准じてこれを悉くせよ。

【典拠】

- (1) 『秘経』…『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』（大正一八・二九一頁上）に、「自性及受用・変化并等流 仏徳三十六、皆同(2)自性身(2)。并(2)法界身(2)、総成(2)三十七(2)也」とあることを指すか。
- (2) 『釈経』…『大衆金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』卷下（大正一九・六一五頁上）に、「一切

外道諸天、悉具_二如来蔵_一。是未來仏。令_二捨_レ邪歸_レ正故、名_二恐怖一切如来_一。如来者、離_二五怖_一得_二四無所畏_一、無_レ能怖_レ者也。今所_二恐怖_一非_レ在_二果位_一如来_上、乃在_二因位_一也」とあることを指すか。

(3) 五季・古代中国の五つの王朝を指すか。すなわち、唐・虞・夏・殷・周のこと。あるいは、唐が滅び北宋が興るまでの間に興った後梁・後唐・後晋・後漢・後周のこと。五代ともいう。

(4) 五大・地・水・火・風・空の五大、万物の構成要素。

(5) 五穀・五つの穀物のこと。大麦・小麦・稻穀・小豆・胡麻(『蘇悉地羯囉經』卷中(大正一八・六二頁中)等)、稻穀・小豆・小麦・大麦・青稞(『陀羅尼集經』卷一二(大正一八・八九三頁下)等)、粟・大麦・青稞・小豆・稻穀(『陀羅尼集經』卷九(大正一八・八六二頁上)中)等)、など、経軌によつて説は一同ではない。

(6) 五常・儒教で人が常に行うべき五つの正しい道、すなわち、仁・義・礼・智(知)・信のことを指すか。あるいは、五戒(不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒)のことも五常というため、このいずれかを指していると考えられる。

(7) 五音・五種の音調のこと、すなわち、宮・商・角・徵・羽のこと。

(8) 四行菩薩・胎蔵曼荼羅の八葉四隅の四菩薩で、すなわち、東南普賢・西南文殊・西北観音・東北弥勒のこと。

(9) 天地曼荼羅・天曼荼羅と地曼荼羅のこと。伝空_二海撰_一『両宮形文深釈』卷上(弘全五・一五〇頁)に「内者通_二胎蔵界_一現_二地曼荼羅_一、外者通_二金剛界_一顯_二天曼荼羅_一也」とあるように、地曼荼羅は胎蔵界

を指し、天曼荼羅は金剛界を指す。ただし、『兩宮形文深釈』は空海の真撰ではないとされ、いつ著されたのかも不明である。

なお、了賢（一二七九～一三四七）と同時代の台密学僧である澄豪（一二五九～一三五〇）撰『総持抄』卷三「虚空藏法事 三形事」（大正七七・六三頁上）には、「身色金色者、理智不二之色也。此尊著_二五仏宝冠_一事、五仏表_レ地。五智表_レ天。此菩薩天曼荼羅、金界義也。今五仏宝冠地曼荼羅、胎藏意也」とあることから、了賢の在世時には、天曼荼羅を金剛界、地曼荼羅を胎藏界と呼称するケースがあつたことは指摘できる。

(10) 四定・『秘藏記』（弘全二・一七頁）に、「瑜伽者、修_二習四無量心定_一、誦_二四無量心真言_一、於_二未來所有人天種種魔業障難_一、悉皆除滅、身中頓集_二無量福聚_一、心得_二調柔_一、堪任自在」とあることから、四無量心（慈・悲・喜・捨）を指すと考えられる。『秘藏記』では、行者が四無量心を観じて修行すれば、三毒の煩惱を離れ、四菩薩の内証に契い、一切衆生を度脱させ、無量の徳を集めて諸事を成就することができる（弘全二・一五～一七頁）。四無量心を四菩薩や五智などに配釈すると以下ようになる（図は『密教大辞典』を参照した）。

慈	四無量心	所断の煩惱	識体	智体	四菩薩（金）	四菩薩（胎）	五仏
貪			阿頼耶識	法界体性智 大円鏡智	金剛薩埵	普賢	阿閼

捨	喜	悲
三事に通ず	痴・嫉妬	瞋
前五識	意識	末那識
成所作智	妙觀察智	平等性智
虛空庫	觀自在	虛空藏
弥勒	觀音	文殊
不空成就	阿弥陀	宝生

(11) 『秘経』…詳細不明。『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門』(大正二八・二八八頁上)の「謂自性身・受用身・變化身・等流身、滿二足五智・三十七等」不共仏法」を指すか。

【解説】

問者の重難を受けての回答。答者は、東密では因も果も不生、迷と悟も覺了であるとし、東密は因と果が等しいと主張する。そのため、『分別聖位経』に三十七尊をすべて自性身と名づけるとあり、また『秘経』(『理趣釈経』を指すか)には、因果に共に如来の名を挙げると説かれているとする。その上で顕教は、密教とは異なり、因果が等しいとみないため、因を捨てて果を取るのです、仏の仮の姿を見て実体を知らないとする。

また答者は、そもそも五仏とは、大日ほ極果圓滿の総体であることをもって仏とし、他の四仏は本有の四点(四転)の辺徳、発心・修行・菩提・涅槃であることをもって仏としているとする。この義を顕

わずために、東密では五仏が別体であると主張するのだとする。

五仏が具えている智が平等ではないという過失については、人法は一体であるから、法があれば必ず人がある。五智という五つの智があるのだから、仏にも必ず五仏があるはずであるとする。しかし、五仏は一智をつかさどってはいるが、実にはそれぞれが五智全てを具えているので、五仏は五智を円満に具えていると主張する。したがって、四仏は大日如来に対する四智であり、東方の四菩薩（金剛薩埵・金剛王・金剛愛・金剛喜）は阿閼如来に対する四智である。それに中台（四仏であれば大日、東方の四菩薩であれば阿閼）を合して五智とするとし、その他の仏（南方宝生如来・西方阿弥陀如来・北方不空成就如来）も、これに准じているとする。また、あらゆるものは全て四方にあり、その中の五季、五大、五穀、五常、五音、これ等もすべて法性であるとし、人という観点より論ずる際にそれらを五仏と名づけるのだとする。

次に、五方以外の四維・上下の仏が智を具えていないという過失については、四維の仏智は金剛界の八供養菩薩（嬉・鬘・歌・舞・香・華・灯・塗）であり、これは胎藏曼荼羅の四行菩薩の三摩地であるとする。また上方は金剛界大日（智・陽）、下方は胎藏界大日（理・陰）であるとし、金剛界を天曼荼羅、胎藏界を地曼荼羅と号するのはこの意義によるとする。これによって、あらゆる仏がひとえに智をつかさどるべきではなく、戒・定・慧などの功德がそれぞれの仏体を現わすのだと主張する。したがって、五方の仏は五智の所現であり、四維の尊は四定であり、上下の仏は理智であるとする。

あるいは別の解釈として、諸尊はすべからず智を表わすというとし、その根拠に『秘経』（『分別聖位経』

を指すか)の「三十七尊は円満の智である」という文を引いている。定と慧とを分けるといふ義辺があるとしても、総じてこれらを智と名づけるため、十方の仏はそれぞれが一智を表わしていると主張する。そして、十方仏がそれぞれ一智を具えているといつても、実には五仏と同様に、五智全てを具えていると主張している。

【原文】

問。已云十方仏土。何以四維為四行菩薩耶。

答。十方仏土各对辺成中位義者可為大日。若对中位成辺義者四方四仏、四維四菩薩也。随義理成其形相故也。仍随相望雖不定、因果共名仏之上者、十方仏土之言更不相違歟。但十方仏土廢立者、以上下為兩部中位大日、以餘方為四智四定之義門也。是以金輪儀軌云、十方仏土中唯有智拳印^文。智拳印者大日也。中位大日為主、餘方諸仏為伴故、云唯有智拳印也。

【訓読】

問う。已に十方仏土と云う。何ぞ四維を以て四行菩薩とやせん。

答う。十方仏土各の辺に対して中位の義を成ずれば大日と為すべし。若し中位に対して辺の義を成ず

れば四方四仏、四維四菩薩なり。義理に随いて其の形相を成ずるが故なり。仍て相望に随いて不定なりと雖も、因果共に仏と名づくるの上は、十方仏土の言更に相違せざるか。但し十方仏土の廢立は、上下を以て兩部中位の大日と為し、餘方を以て四智四定と為すの義門なり。是を以て『金輪儀軌』に云く、「十方仏土の中唯だ智拳印のみ有り」と文り。「智拳印」とは大日なり。中位の大日を主と為し、餘方の諸仏を伴と為すが故に、「唯有智拳印」と云うなり。

【典故】

(1) 『金輪儀軌』…『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（大正一九・三三三頁中）に智拳印の釈として、「右執^二左頭指^一、十方刹土中、唯有^二一仏乘如来之頂法^一、等持^二諸仏体^一。是故名^二智拳^一」と説かれることを指すか。

【解説】

先の問答を受けての第三重の問答である。問者は、十方仏土といっているのに、なぜ四維の仏土を四行菩薩とするのか、すなわち、仏土といっているのに、そこに菩薩が当てられるのはおかしいと難ずる。それに対して答者は、十方仏土という辺（はて、かぎり）に対して中央という位の義を成ずる（十方に辺地があるから中央があるという観点）ならば、四方四維はすべて大日であり、中央という位に対して十方

という辺の義を成ずる（中央があるから辺地があるという観点）ならば、四方は四仏、四維は四菩薩であるとして、二つの視点を提示する。したがって、視点によって一定しないが、密教では因果を共に仏とみるため、十方仏土といっても問題は無いと主張する。

ただし、十方仏土の廃立（十方仏土を各別と見る場合）は、上下を両部の大日、他の八方を四智・四定とすると主張する。これによつて、『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』に、「十方仏土の中に智拳印のみ有る」と説かれているのだとする。このように説かれているのは、智拳印は大日如来のことであり、中央の大日を主、他方の諸仏を伴とすると主張している。

【原文】

問。何故四方者仏、四維者菩薩耶。

答。正方者智也。限一方不涉餘方。是智徳簡摺義也。角方者理也。涉二方兼之。是理徳平等之義也。智者依果、理者依因。故四方為仏、四角為菩薩也。凡密教宗義異餘宗。執顯淺義勿破密深旨。徳一懸顯網疑密意。尤可哀之。

【訓読】

問う。何が故に四方は仏、四維は菩薩なるや。

答う。正方は智なり。一方に限りて餘方に涉らず。是れ智徳簡択の義なり。角方は理なり。二方に涉りてこれを兼ね。是れ理徳平等の義なり。智は果に依り、理は因に依る。故に四方を仏と為し、四角を菩薩と為すなり。凡そ密教の宗義は餘宗に異なれり。顕の浅義に執して密の深旨を破すること勿れ。徳一は顕網に懸かりて密意を疑う。尤もこれを哀れむべし。

【解説】

第四重の問答。問者は、なぜ四方は仏で四維は菩薩なのかと問う。それに対して答者は、正方（東・南・西・北）は智をあらわすとす。これは智の徳が簡択（分別）の義であり、正方は他の方角にわたらずに一方のみに限るためであるからとす。それに対して、角方（東南・西南・西北・東北）は理をあらわすとす。これは理の徳が平等の義であり、角方は、東南ならば「東と南」というように、二方にわたっているためであるとする。そして、智は果により、理は因によるため、果である仏が四方に、因である菩薩が四維に当てられると主張している。

最後に、密教の宗義は他の宗とは異なるものであり、顕教の観点より密教の深旨を破してはならないと説く。また、徳一は顕教に執して、その観点から密教の義を疑っているため、最も哀れであると述べている。

【原文】

一、十方仏土者隨機応現。不可比擬真言事

凡法華所顯十方仏土、阿弥陀経所説六方如来、仏名経所列三千仏等、皆是隨機応現也。所以者何、彼等皆釈尊所説顯経、非大日法身如義語。又纔雖説名字、不明種子・真言・印明。非法性身之条、勿論也。何以之比較真言仏耶。

【訓読】

一、十方仏土は隨機応現なり。真言に比擬すべからざる事

凡そ『法華』⁽¹⁾に顯るる所の十方仏土、『阿弥陀経』⁽²⁾に説く所の六方如来、『仏名経』⁽³⁾に列する所の三千仏等、皆な是れ隨機応現なり。所以いかんとなれば、彼等は皆な釈尊所説の顯経にして、大日法身の如義語に非ず。又た纔かに名字を説くと雖も、種子・真言・印明を明かさず。法性身に非ざるの条、勿論なり。何ぞこれを以て真言の仏に比較せんや。

【典故】

(1) 『法華』…『妙法蓮華經』卷一（大正九・八頁上）に、「十方仏土中、唯有二乘法」、無二亦無三」とあることを指す。

(2) 『阿弥陀經』…『仏説阿弥陀經』（大正二・三四七頁中～三四八頁上）に、「舍利弗、如我今者讚歎阿弥陀仏不可思議功德」、東方亦有阿閼鞞仏、須弥相仏、大須弥仏、須弥光仏、妙音仏、如是等恒河沙数諸仏」。……（中略）…舍利弗、南方世界有日月灯仏、名聞光仏、大焰肩仏、須弥灯仏、無量精進仏、如是等恒河沙数諸仏」。……（中略）…舍利弗、西方世界有無量寿仏、無量相仏、無量幢仏、大光仏、大明仏、宝相仏、浄光仏、如是等恒河沙数諸仏」。……（中略）…舍利弗、北方世界有焰肩仏、最勝音仏、難沮仏、日生仏、網明仏、如是等恒河沙数諸仏」。……（中略）…舍利弗、下方世界有師子仏、名聞仏、名光仏、達摩仏、法幢仏、持法仏、如是等恒河沙数諸仏」。……（中略）…舍利弗、上方世界有梵音仏、宿王仏、香上仏、香光仏、大焰肩仏、雜色宝華嚴身仏、娑羅樹王仏、宝華徳仏、見一切義仏、如須弥山仏、如是等恒河沙数諸仏」。各於其国、出広長舌相、遍覆三千大千世界説誠実言。汝等衆生、当信是称讚不可思議功德一切諸仏所護念経」とあることを指す。

(3) 『仏名經』…『三劫三千仏縁起』（大正一四・三六四頁下）に、「爾時釈迦牟尼仏、告大衆言、我曾往昔無数劫時、於妙光仏末法之中、出家学道、聞是五十三仏名。聞已合掌、心生歡喜。復教他人令得聞持。他人聞已展転相教、乃至三千人。此三千人異口同音称諸仏名、一心敬礼。如

られる。

【原文】

一、十方仏土以密教意料簡事

本迹不二故、撰迹歸本者、雖隨機応現仏、全是法性身之全体也。仍以密教意見之者、兩部曼荼羅已体也。其旨、如上述。

【訓読】

一、十方仏土を密教の意を以て料簡する事

⁽¹⁾ 本迹不二の故に、迹を撰して本に歸すれば、隨機応現の仏と雖も、全く是れ法性身の全体なり。仍て密教の意を以てこれを見れば、兩部曼荼羅の已体なり。其の旨、上述の如し。

【典拠】

(1) 本迹不二・本迹とは、本門と迹門の二門のこと。本門とは、仏の本地・根源・本体を顕わす面である。迹門とは、本門の仏の応現・垂迹を示した面である。この本門の仏と迹門の仏を不二体と見る

ことを本迹不二としている。

【解説】

前の問答に付随する問題の第二点目は、「密教の観点より十方仏土を考察する」というものである。密教では本門（法身大日如来）と迹門（その他の諸仏）は不二と考えるため、迹門の諸仏を本門に帰摂すれば、機根に応じて現ずる仏（迹門の仏）であっても、本門である法身大日如来の体であるとする。このような密教的な観点より論ずれば、迹門の仏（隨機応現の仏）も両部曼荼羅の体であると説かれている。

【原文】

一、徳一難不可当事

徳一為相宗学者故、隨機応現仏之外不知之。仍以顕教意難密教義。以短綆測井之謂歟。

【訓読】

一、徳一の難は当たるべからざる事

徳一は相宗の学者為るの故に、隨機応現の仏の外にこれを知らず。仍て顕教の意を以て密教の義を難

ず。短綆を以て井を測るの謂か。

【解説】

前の問答に付随する問題の第三点目。徳一は法相宗の学僧であるため、機根に応じて現れる仏の他に法身大日如来がいることを知らず、顕教の観点から密教を難じているとし、徳一の疑難は密教に対して適切でない主張している。

以上、この「五智各別仏体事」という条目は、徳一撰『真言宗未決文』の「五智疑」を問題の根幹として、問者は顕教的な立場より難じ、対して答者は真言密教の立場を宣揚するものであった。具体的には、「仏は五智をすべて備えているはずであり、五仏がそれぞれ一智のみを備えているという真言密教の見解は誤りである」と問者が難じ、それに対して答者が、「因果を等しいと見る」や、「五方の仏がそれぞれ一智のみを備えているといつても、実際にはあらゆる仏が五智すべてを備えている」という真言密教の立場より回答している。すなわち、ここで五仏がそれぞれ一智のみを備えるといったのは、極果円満の総体である中央大日と、発心・修行・菩提・涅槃の四転をあらわす四仏という観点より論じたためであると主張していた。

つまり、この問者の難に対して、答者は一門的な観点より回答しているといえる。また、この答者の一門的な視点は、前の条目（釈迦外有大日別体否事）で、顕教の教主釈迦と密教の教主大日との各別を説

いていること、すなわち、顕密対弁するときは、普門的な観点より論じられる大釈同体ではなく、一門的な大釈別体を主張するということが同様であるといえる。⁸⁾

なぜ本条目や前条目において、了賢が顕密対弁の観点より論じているのかといえば、冒頭にも示した通り、偏にこの『他師破決集』という著作が、東密の教義等に対して他宗の諸学匠がおこなった疑難を破するための書であるからであろう。

註

- 1 『仁和寺史料』「寺誌編一」二二二頁（吉川弘文館・二〇一三）。
- 2 『仁和寺史料』「寺誌編一」三三八頁（吉川弘文館・二〇一三）。
- 3 この「毛利時賢」と「毛利親宗」が如何なる人物であるのかは不明であり、同一人物であるのかも不明である。尚、了賢の事績等については『密教大辞典』や『真言宗全書』解題「著者略伝」（三三九頁上〜三四〇頁上）に詳しい。
- 4 『真言宗全書』解題（二二六頁下〜二二九頁下）。
- 5 『他師破決集』卷二（真全二・二五八頁上）。
- 6 『他師破決集』卷五（真全二・三〇八頁下）。
- 7 『真言宗全書』解題では、「大覚寺殿」を「性円親王殿」と推測している（二二九頁上）。
- 8 前の条目（釈迦外有大日別体否事）で議論される「大釈同異」の問題については、拙稿「了賢撰『他師破決集』訳注（二）―卷第一ノ二―」（『川崎大師教学研究紀要』四・二〇一九）、並びに拙稿「大釈同異論再考」（『智山学報』二六九・二〇二〇）を参照されたい。

〈キーワード〉了賢、『他師破決集』、徳一、『真言宗未決文』、五智